

「そう遠くない未来に、世界は大きく変わってしまうだろう」と。
皮肉な事に、その言葉は二年後に現実のものとなる。始まりはある施設の研究所。そこで研究されていたウイルスが、何かの手違いで施設内に広まった。所謂、バイオハザードである。ウイルスの感染経路は最悪な事に空気感染だった。通風ダクトを通してウイルスはあつという間に施設内に広まる。ゲームや映画の世界が現実となった瞬間だった。蝕まれていく身体。気付いた時には手遅れで、目の前に迫る死は既にカウントダウンが開始されてしまっている状態。
一人：また一人と周りの人間が死んでいく光景を、複雑な思いで見える研究者達。絶望に耐えきれず自ら命を断つ者も少なくはなかった。
だが：悪夢は生きる事を諦め命を断ったとしても、それで終わりではなかったのだ。
一度は完全に生命活動を止めた身体が再び起きあがる。ただ、そこに理性や感情は伴わない。満たされぬ飢えと言いつつ怒りに支配された化け物。生きる屍と成り果てた研究者達は、次々と同僚や仲間だった人間を襲っていった。三流のB級映画の様な話だが、それが現実として起こってしまったのだ。誰もが夢であって欲しいと願いながら、うち砕かれていく儂い願い。あつと

ンクに燃料は僅かしか残っていない。燃料の状況から、この機械が稼働する時間はあまり残されていないのが伺える。男に残されたチャンスは一度きり。ゆっくりとエンジンかける。静まりかえった廊下に響く無機質な音に反応するかの様に、一瞬目の前の闇が揺れた。静かに目を伏せるとチェーンソーの機械音に混じって男の呼吸音が聞こえてくる。心臓は緊張で痛いくらい鼓動を早くし、手足はガクガクと震える。だが、失敗は許されない。神経を集中し、気配を探る。真つ黒な闇の中に一つだけ強烈に存在を放つモノ。それが男が始末しないといけないモノだ。
「どちらにせよ、男の運命は既に決まっていた。
男に訪れるのは確実な『死』。
男を徐々に浸食していくウイルスは、砕いた仲間から受けた死の洗礼。それはもう、避けられない事実だ。
「ふう…」
深呼吸を数度繰り返す。覚悟は決まった。再び臉を開くと、男はチェーンソーを構え直す。
「うおおおおおっつっつ」
回転する刃を前に付きだし大声で叫びながら、男は闇に向かって駆けだした。
その男は言った。

しん：と静まりかえった廊下。
出口まではどのくらいなのだろう？ 握られた巨大な刃物から滴る血が、白いタイルを濡らす。嘗て此処で同じように働いていた同僚や上司はもう居ない。皆【アレ】に食われ、有る者は肉塊に。有る者は徘徊する者に変わってしまった。全身に被った血は彼らだったモノの名残。泣きながら破壊して回った成れの果ての姿が、そこかしこにまき散らかされている。もう、この施設で【生きている】と呼べる人間は、私一人しか居ない。
だが、私の生命活動も、あと僅かで終わってしまうだろう。それは彼らの血を全身に浴びた時に気付いた。血を媒介として入りこんだウイルスが、私の軀を徐々に蝕んでいる。痛覚はもう殆ど無い。有るのは飢えと倦怠感。この刃物を振るう力も、あと僅かしか残されていないだろう。残された時間は少し。私が私で居られる間に、【アレ】を始末してしまわなければ…
電気設備が完全に死んでしまった暗い廊下に、真つ赤に染まった白衣を着た男が一人。手に握られた巨大なチェーンソーも白衣同様血に濡れ、所々に赤黒い肉片がこびりついている。男は数度深呼吸をした後、真つ直ぐに廊下奥を睨み付ける。真つ黒な闇に蠢く何かを逃がさぬように。エンジンの切れたチェーンソー。ガソリント

いう間に研究施設の大半が徘徊する死霊で埋め尽くされ、死臭が施設内を漂った。感染を最小限に食い止めるため、施設は即座に閉鎖され其処に居た者全てが切り捨てられる。
数少なくなつた生存者達は必死に出口を探した。
しかし、運命という物は非常に皮肉なもので、簡単に悪夢から逃れる事は不可能に近い。出口を探すのもワクチンを探すの間にも合わずに倒れていく生存者達。
研究所が隔離されてから数時間後。
ついに生存者は研究員の男だけとなってしまった。
本来、彼には何の責任も無かった。
ウイルス感染に於ける責任を取る事も、そのために彼が命をかける理由も無い。だが、極限まで追い込まれた状況の中、彼に芽生えたのはちっぽけな正義感だった。
「俺が何とかしなければ」
昔見た映画のスーパーヒーローに憧れていた気持ちがある。ちっぽけな正義は大きな使命に形を変え、彼を突き動かした。
年を取ると共に、現実を押しつぶされ夢を見なくなつてしまったのだろう。描いていた夢の形はとうに崩れ去り、あの頃の純粋な気持ちは「子供の様な恥ずかしい幻

しん：と静まりかえった廊下。
出口まではどのくらいなのだろう？ 握られた巨大な刃物から滴る血が、白いタイルを濡らす。嘗て此処で同じように働いていた同僚や上司はもう居ない。皆【アレ】に食われ、有る者は肉塊に。有る者は徘徊する者にならなくなってしまった。全身に被った血は彼らだったモノの名残。泣きながら破壊して回った成れの果ての姿が、そこかしこにまき散らかされている。もう、この施設で【生きています】と呼べる人間は、私一人しか居ない。

だが、私の生命活動も、あと僅かで終わってしまうだろう。それは彼らの血を全身に浴びた時に気付いた。血を媒介として入りこんだウイルスが、私の軀を徐々に蝕んでいる。痛覚はもう殆ど無い。有るのは飢えと倦怠感。この刃物を振るう力も、あと僅かしか残されていないだろう。残された時間は少し。私が私で居られる間に、【アレ】を始末してしまわなければ……

電気設備が完全に死んでしまった暗い廊下に、真っ赤に染まった白衣を着た男が一人。手に握られた巨大なチェーンソーも白衣同様血に濡れ、所々に赤黒い肉片がこびりついている。男は数度深呼吸をした後、真っ直ぐに廊下奥を睨み付ける。真っ黒な闇に蠢く何かを逃がさぬように。エンジンの切れたチェーンソー。ガソリンタンクに燃料は僅かしか残っていない

い。燃料の状況から、この機械が稼働する時間はあまり残されていないのが伺える。男に残されたチャンスは一度きり。ゆっくりとエンジンをかける。静まりかえった廊下に響く無機質な音に反応するかのようには、一瞬目の前の闇が揺れた。静かに目を伏せるとチェーンソーの機械音に混じって男の呼吸音が聞こえてくる。心臓は緊張で痛いくらい鼓動を早くし、手足はガクガクと震える。だが、失敗は許されない。神経を集中し、気配を探る。真っ黒な闇の中に「つだけ強烈に存在を放つモノ。それが男が始末しないといけないモノだ。」

どちらにせよ、男の運命は既に決まっていた。

男に訪れるのは確実な「死」。

軀を徐々に浸食していくウイルスは、砕いた仲間から受けた死の洗礼。それはもう、避けられない事実だ。

「ふう……」

深呼吸を数度繰り返す。覚悟は決まった。再び瞼を開くと、男はチェーンソーを構え直す。

「うおおおおおっつっつ」

回転する刃の前に付きだし大声で叫びながら、男は闇に向かって駆けだした。

その男は言った。

「そう遠くない未来に、世界は大きく変わってしまうだろう」

と。

皮肉な事に、その言葉は二年後に現実のものとなる。始まりはある施設の研究所。そこで研究されていたウイルスが、何かの手違いで施設内に広まった。所謂、バイオハザードである。ウイルスの感染経路は最悪な事に空気感染だった。通風ダクトを通してウイルスはあっとい間に施設内に広まる。ゲームや映画の世界が現実となった瞬間だった。蝕まれていく身体。気付いた時には手遅れで、目の前に迫る死は既にカウントダウンが開始されてしまっている状態。

一人：また一人と周りの人間が死んでいく光景を、複雑な思いで見える研究者達。絶望に耐えきれず自ら命を断つ者も少なくはなかった。

だが：悪夢は生きる事を諦め命を断つたとしても、それで終わりではなかったのだ。

一度は完全に生命活動を止めた身体が再び起きあがる。ただ、そこに理性や感情は伴わない。満たされぬ飢えと言いやうのない怒りに支配された化物。生きる屍と成り果てた研究者達は、次々と同僚や仲間だった人間を襲っていった。三流の低級映画の様な話だが、それが現実として起こってしまったのだ。誰もが夢であって欲しいと願いながら、うち砕かれていく。儚い願い。あっとい間に研究施設の大半が徘徊する死霊で埋め尽くされ、死臭が施設内を漂った。感染を最小限に食い止め

るため、施設は即座に閉鎖され其処に居た者全てが切り捨てられる。

数少なくなつた生存者達は必死に出口を探した。

しかし、運命という物は非常に皮肉なもので、簡単に悪夢から逃れる事は不可能に近い。出口を探すのもワクチンを探すのも間に合わずに倒れていく生存者達。

研究所が隔離されてから数時間後。

ついに生存者は研究員の男だけとなってしまっていた。

本来、彼には何の責任も無かった。

ウイルス感染に於ける責任を取る事も、そのために彼が命をかける理由も無い。だが、極限まで追い込まれた状況の中、彼に芽生えたのはちっぽけな正義感だった。

「俺が何とかしなければ」

昔見た映画のスーパーヒーローに憧れていた気持ちが蘇る。ちっぽけな正義は大きな使命に形を変え、彼を突き動かした。年を取ると共に、現実を押しつぶされ夢を見なくなってしまうのだらう。描いていた夢の形はとうに崩れ去り、あの頃の純粋な気持ちは「子供の様な恥ずかしい幻想」としか捉えられなくなっていた。スーパーヒーローになるという夢はとうに諦めてしまっていた彼だったが、死を目の前にしてその「子供の様な幻想」が再び、姿形を持って彼の目の前に現れたのだ。

「うおおおおおつつつつ」

回転する刃の前に付きだし大声で叫びながら、男は闇に向かって駆けだした。

その男は言った。

「そう遠くない未来に、世界は大きく変わってしまうだろう」と。

皮肉な事に、その言葉は二年後に現実のものとなる。始まりはある施設の研究所。そこで研究されていたウイルスが、何かの手違いで施設内に広まった。所謂、バイオハザードである。ウイルスの感染経路は最悪な事に空気感染だった。通風ダクトを通してウイルスはあつという間に施設内に広まていく身体。気付いた時には手遅れで、目の前に迫る死は既にカウントダウンが開始されてしまっている状態。

一人…また一人と周りの人間が死んでいく光景を、複雑な思いで見える研究者達。絶望に耐えきれず自ら命を断つ者も少なくはなかった。

だが：悪夢は生きる事を諦め命を断ったとしても、それで終わりではなかったのだ。

一度は完全に生命活動を止めた身体が再び起きあがる。ただ、そこに理性や感情は伴わない。満たされぬ飢えと言いやうのない怒りに支配された化け物。生きる屍と成り果てた研究者達は、次々と同僚や仲間だった人間を襲っていった。三流のB級映画の様な話だが、それが現実として起こってしまったのだ。誰もが夢であつて欲しいと願いながら、うち砕かれていく儂い願ひ。あつという間に研究施設の大半が徘徊する死霊で埋め尽くされ、死臭が施設内を漂った。感染を最小限に食い止めるため、施設は即座に閉鎖され其処に居た者全てが切り捨てられる。

数少なくなった生存者達は必死に出口を探した。

しかし、運命という物は非常に皮肉なもので、簡単に悪夢から逃れる事は不可能に近い。出口を探すのもワクチンを探すのも間に合わずに倒れていく生存者達。

研究所が隔離されてから数時間後。

ついに生存者は研究員の男だけとなってしまっていた。

本来、彼には何の責任も無かった。

ウイルス感染に於ける責任を取る事も、そのために彼が命をかける理由も無い。だが、極限まで追い込まれた状況の

しん…と静まりかえった廊下。

出口まではどのくらいなのだろう？ 握られた巨大な刃物から滴る血が、白いタイルを濡らす。嘗て此処で同じように働いていた同僚や上司はもう居ない。皆【アレ】に食われ、有る者は肉塊に。有る者は徘徊する者になつてしまった。全身に被った血は彼らだったモノの名残。泣きながら破壊して回つた成れの果ての姿が、そこかしこにまき散らかされている。もう、この施設で【生きている】と呼べる人間は、私一人しか居ない。

だが、私の生命活動も、あと僅かで終わってしまうだろう。それは彼らの血を全身に浴びた時に気付いた。血を媒介として入りこんだウイルスが、私の軀を徐々に蝕んでいる。痛覚はもう殆ど無い。有るのは飢えと倦怠感。この刃物を振るう力も、あと僅かしが残されていないだろう。残された時間は少し。私が私で居られる間に、【アレ】を始末してしまわなければ…

電気設備が完全に死んでしまった暗い廊下に、真つ赤に染まった白衣を着た男が一人。手に握られた巨大なチェーンソーも白衣同様血に濡れ、所々に赤黒い肉片がこびりついている。

る。男は数度深呼吸をした後、真つ直ぐに廊下奥を睨み付ける。真つ黒な闇に蠢く何かを逃がさぬように。エンジンの切れたチェーンソー。ガソリンタンクに燃料は僅かしが残っていない。燃料の状況から、この機械が稼働する時間はあまり残されていないのが伺える。男に残されたチャンスは一度きり。ゆっくりとエンジンをかける。静まりかえった廊下に響く無機質な音に反応するかのようには、一瞬目の前の闇が揺れた。静かに目を伏せるとチェーンソーの機械音に混じつて男の呼吸音が聞こえてくる。心臓は緊張で痛いくらい鼓動を早くし、手足はガクガクと震える。だが、失敗は許されない。神経を集中し、気配を探る。真つ黒な闇の中に一つだけ強烈に存在を放つモノ。それが男が始まらないといけないモノだ。

どちらにせよ、男の運命は既に決まっていた。

男に訪れるのは確実な「死」。

軀を徐々に浸食していくウイルスは、砕いた仲間から受けた死の洗礼。それはもう、避けられない事実だ。

「ふう…」

深呼吸を数度繰り返す。覚悟は決まった。再び瞼を開くと、男はチェーンソーを構え直す。